

ゲンキな団員!

ビーパル地域活性化総合研究所

グリーン・ツーリズム&
ローカル・ビジネスの
成功方程式を解く調査レポート

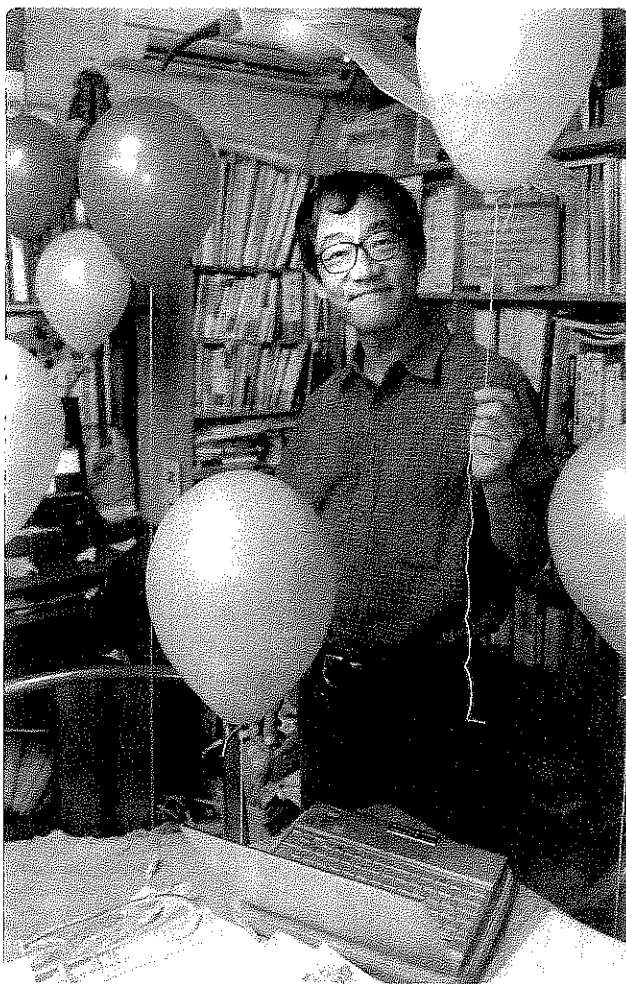
レポート 鹿熊 勤 (主任研究員)

第76回

生物多様性社会の時代到来。
自然系NPOの次なるミッションは?

●インタビュー 飯島 博さん(アサザ基金代表理事)

役所や企業はもう敵じゃない 協働力で新しい価値を創るとき



近年、地域のオピニオンリーダーとして存在感を増している自然・環境系NPO。これらの市民活動は、すでに社会の仕組みを変えるところまで力をつけている。そのけん引役に、見え始めた環境共生型社会の姿について聞く。

⇒いいじま・ひろし 特定非営利活動法人アサザ基金代表理事。1956年生まれ。縦割りの壁を壊すだけでなく「溶かす」発想で、経済とも連携したユニークな協働モデルを次々と発案。手に持っているのは、明治神宮の森から原宿表参道に吹く風の道を探すウォーク・イベントの風船。

内閣府の統計によると、現在、全国に約4万団体のNPO法人(※1)が存在する。このうち、定款の活動目的に「環境保全」を掲げる組織が3割近くあるという。

茨城県牛久市のNPO法人アサザ基金は、それら自然系NPOのなかでも、とくに目覚ましい成果を上げている団体として知られる。活動舞台は霞ヶ浦水系だ。高度

経済成長期以降、悪化をたどってきた湖の自然を再生させるため、さまざまなプロジェクトを発案。

どの立場の人にもメリットのある共通目標を見つけて企画化し、学校や農林水産業、行政、企業を引き込んで協働の輪を広げている。

そのアサザ基金をリードするのが代表理事の飯島博さんだ。

「NPOの仕事は飯島さんにとって専業ですか。それとも兼業でしょうか？」

「NPO法人になってからは専業です。それまではつくば市の農業環境技術研究所で、里山の生物保全のためのフィールド調査をやっていました。この仕事も面白かったんですけど、僕がいつかやりたかった仕事は自然をベースにした社会システムの構築。世の中の仕組みを、スローガンだけでなく真の意味で自然と共存できる形に変えていくことでした」

※今月の題字は飯島博さんに書いていただきました。

※1/NPO (Non Profit Organization) = 収益を目的としない社会貢献活動組織。NPO法人は国や都道府県から法人格の認可を受けたNPO

あなたが動けば、社会は変わる。

あなたの社会貢献活動に
「足りないモノ」
は何ですか？

2011年度 助成事業募集

10/1(金)~11/1(月)

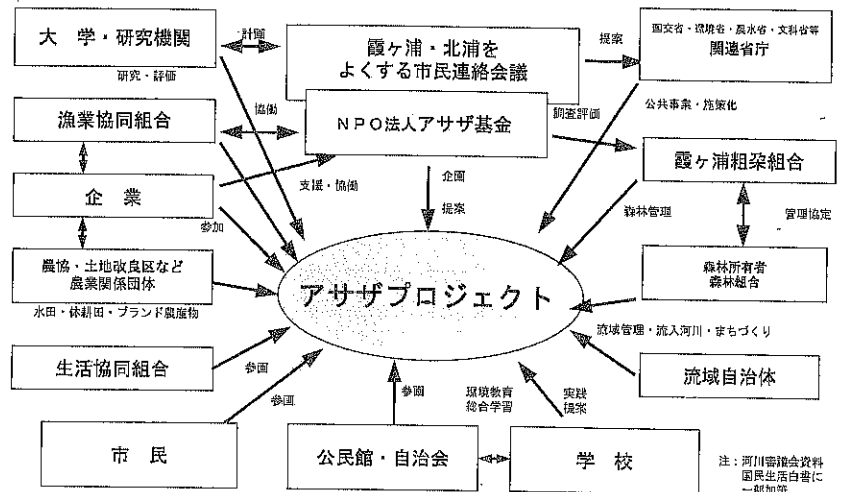
日本財団

検索

- 詳しくはウェブサイトをご覧ください。
- 助成対象団体：社会福祉法人、財団法人、
社団法人、NPO法人、ボランティア団体など
- お問い合わせ：03-6229-5111
(平日9:00~17:00)

 **日本財団**
The Nippon Foundation

中心に組織の無いネットワークへ市民型公共事業



市民型公共事業におけるネットワーク図。組織に壁や中心をつくらず、細胞膜でつながる生命体のように、柔軟で新陳代謝の活発な組織を目指している。

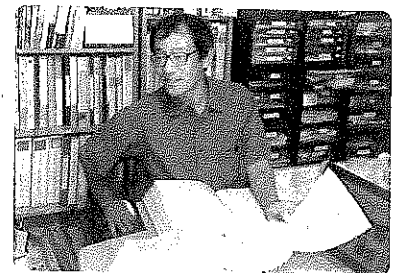
丸い部分はアサザの里親制度を縁に交流を続ける学校。流域を結ぶこのネットワークは協働の新しい可能性をたくさん持っている。



市民団体が手を携えた、初のづくり公共工事です。
作業をしていると黒塗りの車が来ました。降りてきたのは当時の建設省霞ヶ浦工事事務所の所長。何をいうのかと思ったら「一緒にやりませんか」。勝手に進められると役所の沽券にかかわるという

ことだと思いましたが(笑)、時代の変化を象徴するひとりでした。—— 当時はどんな時代でしたか。
「95年ごろというのは、ゼネコン汚職が次々と発覚した時期。公共事業の在り方への怒りが沸点に達し、役所もこのままではいけないと思っていたはず。もちろん僕らも批判をしたけれど、利権がはびこる構造になったのは市民が工事を丸投げしたせいでもあります。昔は道路が傷んだりすると、できるところは地域の人たちが自主的に直した。これからの公共工事は昔の普請の発想を取り入れるべきだという思いに、アサザと粗朶がピタッととはまったんです」
役所の協働メリットは、市民の心証をよくすること？
「霞ヶ浦は平野部にあるので、流域の森林面積は2割ぐらいしか残っていません。この状況は治水を

預かる役所としては好ましくないんですが、水源の森林は林野庁の領域。僕らのネットワークに参加すれば間接的に森林政策にも関わっていくことができる。そんな読みもあったと思います。
僕が模索してきたのは、固い壁を築いて意思を集約する運動組織ではなく、細胞膜のように柔軟で随時必要なものを交換できる、生物体のようなネットワークです」

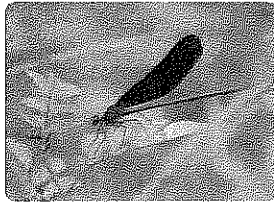


会「100年後にトキが戻ってくる、霞ヶ浦に」といつてきましたが、今の流れでいけば、夢物語ではなく実現すると断言できます」

ゲンキな田舎!



◀企業も、協働に新たな可能性を見いだそうとプロジェクトに社員を参加させる。「今は環境意識の向上や社会貢献が目的ですが、理想は営業や製造の現場がビジネス目線で参加すること」(飯島さん)※都市部の自然再生のシンボルとして注目しているハグロトンボ。



NPOの役割はホルモンと同じ 微量で大きな方向付けを果たす

—そうした協働の場におけるNPOの役割とは何でしょう?

「ごく微量で臓器や細胞の動きに大きな方向付けを示すホルモンのようなものと思っています。自然

の仕組みは、組織の在り方を学ぶうえでも参考になりますよ」

—最近、田んぼの生物をブランド化した環境共生米が増えていますが、飯島さんが企画した『オオヒシクイ米』が嚆矢だとか。

「関東最大の貴重なオオヒシクイの越冬地に圏央道が通ることになりました。工事認可の過程に不透明なことが多々あって、僕はオオヒシクイを原告に茨城県知事を相手取った裁判を起こしたのです。ただ、鳥を守れと叫ぶだけでも理解が得られないこともわかっていました。守ることにより農家も

何らかのメリットが生じる方法。それが田起こしの遅れなど、越冬を見守ることで生じた損失を、その水田でとれた米の値段でカバーすることでした。裁判での訴えは棄却されましたが、自然との共生には価値があるということを目に見える形にできたことで、その後の活動に広がりが生まれました」

—今は企業とも連携しています。学校、第一次産業、行政とネットワークが広がれば、当然見えてくるのが企業です。社会を変えるということとは経済の仕組みを変えること。言い換えると、企業、と

りわけ大企業の意識が変わらなければ社会は変化なんてできません。得意分野を生かしながら地域づくりに関わっていくなかで、新しい価値やサービスを創造して社会をよりよくしていく。それがこれからの企業像だという考えに、約20社が賛同してくれています」

—具体的な協働内容は?

「最初に提携したのはNECです。ネットワークセンサーという、セ

ンター機能がなくても拠点どうしの連携で情報を共有できる先端技術を持っているんですが、社会に浸透させる実験の場がなかった。そこでアサザの里親で縁が生まれた流域の各学校に、気象データなどの環境モニタリングができる装置をおくことを提案しました。

いちばんわかりやすい例は酒蔵との協働かもしれません。耕作放棄が進む谷津田を復元するため環境共生型の農法で酒米を育て、醸した酒に付加価値をつけます。この作業に企業研修や社会貢献、サ

ークル活動を組み込みます。今年から発売する商品に『漁師せんべい』があります。密漁をしない漁師さんから適正価格でエビを買い煎餅に加工。揚げ油は休耕地で育てたナタネやヒマワリから搾りました。それらの肥料には霞ヶ浦の外來魚の魚粉が使われています。使用済み油はバイオディー

ゼルに加工。煎餅の袋詰め作業は、障害者施設に委託しています」



※常勤スタッフは10名。収入の柱は教育、調査などの受託事業で、年間予算は6000万円弱。自然系NPOとしては大きな規模だ。

「いま取り組んでいるのがハグロトンボをシンボルにした街の活性化です。たとえば東京の原宿表参道は、昔は川が流れていました。上流に位置する神宮の森は谷津田だったんです。ここに都心では絶滅したと思われるハグロトンボが生き残っていたんですよ。ハグロトンボは涼しい場所がないと生きれない。逆にいうと、涼しい環境の連続性を復元すれば、都会でもハグロトンボと共生できる。原宿表参道のようなファッションの街は、そうした取り組み自体を意匠化して経済に取り込む力を持っています。囲い込んで守るだけが自然保護ではないし、壁は壊すものでなく溶かすもの。自然系NPOの出番はこれからです」